フランツ・ヴィンターハルターと 19 世紀中葉大衆文化

—— カルト・ド・ヴィジットの流行をめぐって

山口 詩織 （京都大学）

本発表は、フランツ・ヴィンターハルター(Franz Xaver Winterhalter, 1805-1873)が 1858 年に描いた《ヘッセン王女アンナ》と《リムスキー・コルサコフ夫人》の 2 枚の肖像画における構図成立の背景を、1854 年にウジェーヌ・ディスデリ(André-Adolphe-Eugène Disdéri, 1819-1889)が発明し、大流行した写真の一形態であるカルト・ド・ヴィジット(Carte de visite, 以下 CDV と表記する)との関わりから読み解くものである。

ヴィンターハルターは、19 世紀中葉のフランスを中心に汎ヨーロッパの宮廷で活躍した肖像画家である。イギリス女王ヴィクトリア、オーストリア皇后エリーザベトら、19 世紀の王侯貴族の姿を煌びやかに描き出した。

先行研究は、彼の作品制作の社会・政治的背景を明らかにしてきた。その手法は、もっぱら作品分析のみに焦点を絞っており、当時のメディアとの関連については看過されてきた。つまり、1839 年に写真術が公表されていたにも関わらず、「絵画と写真」という当時の美術をめぐる動向という観点が抜け落ちているのである。

本発表は、ヴィンターハルターの作品群の中でも服飾・装飾品・構図が類似しているために特異的な立ち位置を占めている、1858 年作《ヘッセン王女アンナ》と《リムスキー・コルサコフ夫人》の肖像画に注目し、「絵画と写真」の観点から、両肖像画における構図の着想を詳らかにするものである。1850 年代は、写真の誕生によって斜陽化の一途をたどる肖像画の重要な転換期に当たる。この時期に活躍した肖像画家ヴィンターハルターを検討することは、19 世紀中葉における肖像画の変容を示すことに繋がるだろう。

まず、1858 年前後のヴィンターハルターの略歴を概観する。これにより、画壇における当時のヴィンターハルターの特殊な位置づけを確認する。次に、《ヘッセン王女アンナ》、《リムスキー・コルサコフ夫人》の構図を確認し、作品群の中での特異性を示す。続いて、両肖像画の構図と、CDV に散見される姿勢の類似性を検討し、その姿勢に付与されていた意味を分析する。最後に、ヴィンターハルターの肖像画に CDV の姿勢が援用されていたことを示唆する。

以上の手続きにより本発表は、19 世紀中葉にブルジョワの間で大流行した CDV 独自の姿勢を、ヴィンターハルターが絵画に取り入れている、と結論付ける。当時は、「流行している姿勢で CDV を撮影する」ことが市井に好まれていた。しかし、アカデミーにおいては写真を下絵制作に用いている画家がその事実をひた隠しにすることは当然であり、「写真は絵画に追随する」という風潮であった。そのような中で、CDV に特有の「姿勢」を肖像画上に援用した 1858 年の 2 枚の肖像画は、写真との共存を模索する試みに他ならない。これは、美術史家フランカステルが述べるところの「肖像画の消滅期」に向かいつつある時期において、ヴィンターハルターが画壇における自身の特異な立ち位置を自覚した上で、写真との共存を図っていた、ということを示している。